報告⑩

（特集）各地の高校魅力化プロジェクトを紹介　奥尻高等学校の町立移管と高校魅力化（下）

東京でカフェ巡りの生活をして奥尻でカフェを開店した（カフェ・ファーロ）

青山学院大学　樋田　大二郎

カフェ・ファーロの禿（かむろ）あゆみさんは、奥尻高校を卒業後に上京し、三年半の東京生活の後に奥尻島に戻った。Uターンして起業した町民として、そして高校生の活動を支援している町民としてお話を伺った。インタビューは、禿さんが経営するカフェ・ファーロで行われた。

最初に禿さんが起業に至るまでの経緯を伺った。禿さんは、高校卒業後に東京で就職している。東京への憧れがあったという。しかし、いずれは島に帰ってくるつもりでの東京生活であった。

自然がないのはもうわかっていたんで、永遠に東京に住むわけがないと思って。それはもうわかって行ってたんで、どうせだったらこう、もういろんなもの吸収してやろうと思って。本当にいろんな、なんだろう、まずここではできないようなことばっかり。お店だったりもそうだし、仕事も、都会ならではのものをたくさん見させてもらいました。（インタビューより）

地方郡部で起業したり、仕事を承継するときは、新しいスタイルを持ち込むのではなく従来の地元のスタイルをそのまま継続するのでもなく、従来のスタイルを少しずらすといいとされる。そしてそれをできるのはよそ者でもないし生粋の地元民でもなく、「地域内よそ者」だという（樋田有一郎　二〇二〇）。まさに、禿さんは地域内よそ者であり、地域を知り地域外での経験を地域で生かすことができる人であった。

禿さんは喫茶店の空間が好きで、大変苦労してカフェ・ファーロを

開店した。開店までの苦労から、奥尻島の活性化には起業を支援するシステムの充実が必要だと感じている。なお、少しずらすことにかかわっては以下のように地域のニーズをもとに、都会で得た感覚を加味するという工夫をしているという。ファーロは、一見、東京のしゃれた町のカフェと同じ作りだが、実は近くのご老人が気楽に過ごすことができたり、子連れのグループが集まることができる個室があったり、そして地元の人が勉強会を開くことができるように設計されている。ファーロの意味は灯台であり、幼い頃に祖父と灯台の近くを歩いていたという。店内には灯台の写真が飾ってある。自分の理想の内装を押しつけるのではなく、地元の人が使い勝手がいいように作られている。

奥尻高校との関係では、菓子作り等から奥尻高校生の地域活性化の取り組みを応援したり、高校生のアルバイトを雇用したり、実家の民宿が島留学生の下宿をし本人も「島おば」をしている。

私自身、母校っていうのと自分が中学時代、高校時代が楽しかった思い出ばっかりで、そういうのもあったぶん、奥尻がより好きだっていうふうになって今があるっていうふうには思うんですけど、今は、当時の恩みたいなものを今の高校の生徒さんとかに返すって言ったら変ですけど、つないでいきたいなっていう気持ちですね。（インタビューより）

高校生とかかわる理由を「恩回し」という言葉を使って確認したところ、そうだということでした。

インタビューは、カフェ・ファーロの店内で、おいしいコーヒーとケーキをいただきながらおよそ六〇分間、行われました。ご協力、ありがとうございました。

1　東京での経験

――開店に至るまでのことを教えてください。

禿あゆみさん：奥尻高校を二〇〇九年に卒業してすぐ東京に出ました。それで、結局東京にいたのは三年半ぐらいなんですけど、その間に飲食店だったり、パン屋さんだったり、カフェだったりでちょっと働かせてもらって、働いてる中でやっぱり、喫茶店の空間がすごい好きで、東京にいる間はいろいろ、こう、喫茶店巡りとかを一人でよくしていました。コーヒー飲みながら、自分の地元にこういう空間を作りたいなと思って。その思いが強くて、よし、奥尻でお店を開こうと。で、帰ってきました。で、帰ってきてすぐやろうと思ったのですが、金銭面だったりがなかなかうまく進まず、そうしてるうちに、いい巡り会いがあって、今の主人と結婚し、子宝に恵まれ、二人目が生まれた時点で実は一回、お店のことは諦めたんです。やっぱり子どもたちが小さいし、諦めた方がいいのかもしれないと思ったところで、役場の方から新規事業者補助制度のお話をいただいて、やってみませんかっていう話をちょうど、すごく絶妙なタイミングでいただいて。家族ともちょっと話し合いして、それだったら、やってみようかっていう話をいただいて、準備をしながら、去年だから、二〇一八年ですね。で、六月二三日にオープンしたんですけど、六月二三日にオープンする前日に、三人目

を授かったことが発覚し、もうスタートは、妊娠しながらオープンして、今年の一月に三人目出産して。お店と子育てと今、とても忙しいです。

――東京ではあちこちの喫茶店を訪ねたりされていたと思うんですけど、その時期にお店を将来、開きたいなと思ったり、あるいはこんな店がいいかなということを、思いながら過ごしていたということでしょうか。禿さんのケースは高校卒業生のUターン促進的にはもう教科書のような話になります。高校時代を地元で過ごした後に都会で力をつけて島に帰ってきてという意味で。

禿さん：そうですかね？

――こういう喫茶店がいいなと思っていたのは全く偶然ですか。

禿さん：そうですね、いや本当にでも、全く高校時代とかはこういうふうになるとは思い描いてなくて。もちろん、東京に出たのも、実際、奥尻でカフェを開きたいから修行しようと思って出たわけでももちろんなくて、ただただ都会の生活に憧れて、出てみたいなっていう気持ちだけで出てはいたんですけど。やっぱり、もともと奥尻にはいずれ必ず帰ってこようと思って出たので、何年かいてもいいかなとは思っていたんですけど。

――帰ってこようと思っていたのは、奥尻の自然が好きだとか、家族がいるからとか、友達がいるからとか、そういうのが全部合わさったとか、どういう理由でしょうか？

禿さん：そう聞かれるとすごく難しいんですけど、漠然と、奥尻以外で暮らすっていう理由が昔から自分の中ではあまりなくて。もちろん奥尻でしか暮らしたことがなかったんで。電車もないのが、それが普通だったし、服屋さんとかもないのが普通だったし。どっちかというと私的には東京という都会で生活した時間の方が違和感。違和感ていうか、暮らしづらかったというか。

――そうすると、いずれは戻ってくるけども、一回は東京に行ってみようということですか。

禿さん：憧れですね。

2　奥尻島に必要な人材とは

――ご自身の体験を踏まえてという感じなんですけど、今後この地域に必要な地域人材というのは、どのような人材だと思いますか？

禿さん：やっぱり私みたいに、新規事業開業した者からすると、例えばそういう時に必要な書類とか、そういうものの進め方だったりをしっかり教えてくれる人だったり、ちゃんと下のものに伝えてくれる。なんて言えばいいんですかね。伝えていってくれる人です。（自分自身の場合が）すごく、大変だったので。

――この島では、企業の継承とか、あるいは新規事業を始める人というのは少ないですか？

禿さん：少ないですね。はい。

――そういう中で、新規事業を始める、書類のことも含めて大変なことが色々あったと思うんですけど、そういうことを教えてくれる人がいなかったということでしょうか。

禿さん：はい。

――若い人同士でそういうのを助け合うような、それができるほどの新規事業やっている人の数も少ないですか？

禿さん：少ないですね。

――ほぼパイオニアの状態でなさったのでしょうか。

禿さん：はい。

3　地域と学校の協働の意義

――今、パイオニアの卵みたいな高校生がたくさんいるわけですが、高校生たちと地域が関わる、地域が高校と協働することというのは、地域にとってはどんな意味があると思いますか。生徒にとっての意味はたくさんあるかもしれないんですけど、地域にとってどんな意味が

あると思いますでしょうか？

禿さん：んー、地域にとって。そうですね。やっぱり私自身、今あの、留学生の島おばをやらせていただいて、うちの実家も民宿をやっていて、三人ほど高校生が下宿してくれてるんですけど、やっぱり、関わる機会も多くて、本当になんでもない悩みとかも相談してくれるぐらい、ちょっと、仲良くさせてもらってるんですけど、関わると関わらないとじゃ、やっぱり自分が、自分てこんなに、高校生と関わることで、改めてこう自分が、島に対しての熱っていうか、熱をこう、再確認できるっていうか。

――それは、高校生が熱を引き出したり、気づかせたりするということですか。

禿さん：そうですね。

――どのあたりが禿さんの島への熱を再確認させてくれることになったのか、具体例を教えていただけますか。

禿さん：あの、一人の子が奥尻と、今、実家が関西にある子なんですけど、高校卒業して専門学校に行ったら、奥尻に戻ってきたいっていうふうに言ってくれてて、奥尻の漁業に携わった仕事をしたいっていうふうに相談してくれて。具体的に帰ってきたらどういう仕事をするとかっていう話をしてくうちに、だんだんこう、自分も奥尻出て東京行ってこういうふうにやって戻ってきたんだよとかっていうふうに話

すと、向こうもすごい興味深く聞いてくれて。なんて言ったらいいんだろう。すごい嬉しいですね、戻ってきて奥尻で仕事をしたいって言ってくれるのが。

――禿さんが高校を卒業していったん出てまた戻ってきたという経験に関心を持ってくれたのですか？

禿さん：はい、そうですね。

――高校生は話を聞いて関心を持って、どんなことを言いましたか？

禿さん：うーん、その子は奥尻に戻ってきてからの具体的なことは決めてないんだけど、漠然と漁業だったり、あとお料理が好きだから、飲食店をやったりしようかなっていう話をしてくれてて、もしそういう時に、開業するにあたってわからないことがあれば、教えてくださいっていうふうに言ってくれて。私はもう教えますと。自分が大変だったぶん、そういう子たちにはわかりやすく自分がしてほしかったことを本当に伝えていってあげたいなと思って。はい。

――高校生の場合は手順をしっかりとしていない、あるいはデータに基づいていない夢とか希望とかの部分ありますよね？　そういうのと出会った時に、「そんなの現実味がないぞ」というふうにアドバイスするのか、あるいはそれとは違う形で関わっていったりするのか、どんなふうにするんですか？

禿さん：実際にうちに下宿してる三人のうちの一人が、海外に行きたいとかって言ってて。海外で仕事をしてみたいって、すごい漠然と言うんですけど、私は心から応援してます。行ってきなさいって。やることはやらないといけないけど。ゲームばっかりやるのも、すごい周りの大人たちはすごい否定するんですけど、ゲームはダメだっていうふうに言ってるんですけど、私的には全然そんなこと思わなくて。彼の得意分野だと思ってるし。それを生かした仕事がもしかしたらできるかもしれないし。奥尻にいるのも人生のうちのたった三年間しかないから。奥尻でもやりたいことをやって、奥尻から出てもやりたいことをやんなさいと、自分がやりたいことやりに東京に行かせてもらったんで。そういうふうに言ってます。

――高校生としては怒られるんじゃなくて、そういうふうに優しく応援してもらうと、うれしいでしょうね。

禿さん：すっごい調子乗ってますね。その子は（笑）

4　奥尻高校との関わり方

――次の質問をさせていただきます。今、奥尻高校とはどんな形で関わっていますでしょうか？

禿さん：そうですね、島留学生の島おばっていうのと、そしてその下宿先のおばさんっていうのと、あとは奥尻高校の先生たちが、時々研修みたいな形で、勉強会ですね。先生方の勉強会を夜に、夜の六時か

ら八時ぐらいまで場所を貸し切ってやってもらってる、っていうぐらいで、あとは奥高祭でちょっと協力させてもらったりしています。

――学校祭で。

禿さん：はい、学校祭で。

――その研修会をここでやるというのはどういう経緯で？

禿さん：奥尻高校の先生がここをすごく気に入ってくださって、普段そこにある奥尻町議会っていう議員さんたちの使うところで勉強会っていうか、研修をやったことがあったけど、ここだったらコーヒー飲みながらとか、フランクに堅苦しくなくできるかなっていうので、貸して欲しいって言ってくださって。あとはあれですね、今あの、イノベーション事業部っていう部活。その生徒さんたちが、うちパンも焼いたりしてるんですけど、そのパンを函館のシエスタ函館っていう無印良品のお店で代理販売とかしてくれたりしています。

――完売してるというふうに聞いてます。

禿さん：はい、おかげさまで。

――高校とそのように関わろうと思った理由はどんなところにあるんでしょうか？

禿さん：私自身、母校っていうのと、自分が中学時代、高校時代が楽しかった思い出ばっかりで、そういうのもあったぶん、奥尻がより好きだっていうふうになって今があるっていうふうには思うんですけど、今は、当時の恩みたいなものを今の高校の生徒さんとかに返すって言ったら変ですけど、つないでいきたいなっていう気持ちですね。

――ちなみにそれは、恩回しという言葉があるそうです。

禿さん：そうですね、それです。恩回し。

――その高校生たちもまた、恩回ししてくれるといいですね。

禿さん：そうですね。はい、私には返さなくていいです。本当に。

――返さないでということなんですけども、高校生から「ありがとうございます」とか、先生たちから「ありがとうございます」というふうに言われると、ニコッという気持ちになりますか？

禿さん：はい、嬉しいですね。

――今後、奥尻高校さんとはどんなお付き合いになりそうですか？

禿さん：続いていけばいいなと、私自身こう協力できることがあれば、協力していきたいなと思っています。

5　町立移管と全国募集

――禿さんの目線から見て、高校が町立に移管して全国募集を始めたことをどんなふうに感じていらっしゃいますか？

禿さん：そうですね、自分が高校生の時にはまずこう、九州だったり沖縄だったり、東京だったりから来た生徒がたくさんいる教室っていうのが、まずありえない空間だったんですけど。今実際うちにいる子たちは関東と関西と本土の子で、育ってきた文化だったり、しゃべる言葉だったりも違う子たちと交流するのがとっても新鮮で、楽しいです。私自身こう、こっちではこういうふうにしゃべるんですよとかっていうふうに教えてもらったり、「そうなんだ」みたいな、「そういう文化があるんだね」っていう感じで、情報交換したりするのがすごい楽しいです。

――そうするとその、全国募集じゃなければ、あるいは、高校がなくなっちゃったら、そういう感じで話し合う、会話する相手はいなくなりますか。

禿さん：そうですね。実際今この店で土日に、うちに下宿してる関東から来てる子がアルバイトで働いてくれてるんですけど、ここで働くとやっぱり、高校に関わってる人以外の人ともコミュニケーション取ることにもなるので、それが見てて微笑ましいっていうか、良かったなと思って。

６　インタビュー項目終了後のフリートーク

――何か私が聞いたこと以外にこういうのも大事だよとかがあったら教えていただけますでしょうか。

禿さん：私が奥尻に戻ってきてすぐの頃、自分が奥尻でこれから暮らしていくと思って帰ってきて、どうやったら昔みたいなこう、活気が戻ってくるんだろうとか、どんどん閉店していく商店だったりが多くなってたんで、どうやったらもっと観光客が増えるのかなとかって漠然と考えてたんですけど、自分でこう暮らしてくうちに、どうやったら活気が戻るとか、どうやったら観光客が増えるかっていう問題じゃなくって。観光客を呼ぶから活気が出るっていうよりも、もうここに住んでる自分たちがしっかり生活していくことが、自分たちがここで元気に暮らしてれば自ずと勝手に活気が戻ってくるんじゃないかなと思って、ちょっと考え方がその時変わりました。自分が今ここでお店やってるのもそういうふうに思った理由の一つです。

――この店のつくりを見た時に、人が集まれる場所だなということを感じたのですが、それはコンセプトとしてそういうふうにしたいと思っていたのですか？

禿さん：はい、もちろん。はい、そうです。

――実際にはどういう年齢層のどういう方が集まってきたりします

か？

禿さん：ああ、もう本当にありがたいことに、年齢層は広くて、奥の部屋が一応、キッズルームっていって個室兼、一応唯一禁煙部屋なんですけど、あそこを利用するのに子連れの家族、お母さんとちっちゃい子どもだったり。あと奥尻に航空自衛隊さんたちがいるんですけど、そのご家族の方だったり、あとは本当に一人でいる男性の、自衛隊さんたちだったり、あとは近所の商店街のおばちゃんたちが、平日のお昼にこういうとこ、こう使って長時間おしゃべりしたりっていうので本当にあの、バラバラです、年齢層は。あと土日になると、高校生の女の子たちだったり、男の子たちだったり、仕事終わりのコンビニで働いてる人だったり、もう本当、使い方はバラバラですね。時間つぶしの人、ご飯食べにくる人、おしゃべりしに来る人、そういうふうに使ってもらいたかったので、もう、ばっちり、その通りハマってくれたなと思って。しめしめと思ってます。

――この店ができるまでは、そういうお客さんはどこで集まってたんですか。

禿さん：あの、無かったですね。

――コンビニの前でたむろしてた？

禿さん：自衛隊さん、一人暮らしの若い自衛隊さんたちは、夕方の三時ぐらいに、自衛隊のバスで、そこの前から乗って山に登って基地に行くんですけど、その三時までの時間つぶしを、みんなあのコンビニで立ち読みしながらバス待ってたり、っていうのが今は、二時半ぐらいにここに来て。三時前に出て行って、だからここで時間つぶしてくれてたりっていうので、使ってくれてますね。作ってくれてありがとうっていうふうに、感謝していただくことが多くて、良かったなって。

あとやっぱり自分の、子どもたちがまだ赤ちゃんだった時に、土日になってお昼ご飯とか食べに行くかってなっても、どこ行っても、ちっちゃい子ども用の椅子とかもあまりないし。個室っていうのもまずないので。あとやっぱり、禁煙部屋っていうのはなかったですね。そういうので子ども達が泣いたら大変だから今日はやめるかとかっていうふうにしてあんまり行かなかったんですけど。ここはもう親が一緒にコーヒー飲みながら、子どもたちをマットの上で遊ばせたり、ＤＶＤとかも置いてるんで、子どもさん連れのお母さんたちには、すごい使いやすいっていうふうに言ってもらえます。

――なるほど。ところで、さきほど高校時代が楽しかったということでしたが、高校時代の楽しさって、都会での楽しさとは違う楽しさでしょうか。

禿さん：はい、全く違いますね。

――高校時代の楽しさってどんな楽しさでしたか？

禿さん：やっぱり元々自然の中で育ってきたので、まず授業にスキューバダイビングがあったり、っていうのと。

――ありましたね。

禿さん：資格が取れたり。あの、もう普段から常に自然と触れあうことができるのが、楽しかったですね、私は。

――学校帰りに泳ぎに行ったりとか。

禿さん：あ、はい、そうですね。してましたね。暇があれば泳ぎに行ってました。

――そうですか。山の中に入ったりはどうでしょうか？

禿さん：山の中にも入りました。

――アケビとりに行ったりとか。

禿さん：あー、行きましたね。

――そういうこともしましたか。

禿さん：今でもよく子どもたちを連れて、くわ取りに行ったり栗拾いに行ったりしてます、はい。

――そういうのをいっぱいやったのに、東京には憧れたと。

禿さん：そうですね、絶対に行きたかったです、東京は。

――欲張りですね（笑）。

禿さん：欲張りです（笑）。

――東京に行くとそういう自然がなかったので、ちょっと寂しかったですか？

禿さん：あの、自然がないのはもうわかっていたんで、永遠に東京に住むわけがないと思って、それはもうわかって行ってたんで、どうせだったらこう、もういろんなもの吸収してやろうと思って。本当にいろんな、なんだろう、まずここではできないようなことばっかり。お店だったりもそうだし、仕事も、都会ならではのものをたくさん見させてもらいましたね。

――こっちにいると、友達もいるし、おじいちゃんおばあちゃんも、お父さんお母さんも隣の人もいるし、人間関係あったかいのもいっぱいありましたよね？

禿さん：はい。

――東京行って、ちょっと違う人間関係があったと思うんですけども。

禿さん：あー、戸惑いが最初すごいあって、やっぱりみんな歩くのが早くて、ぶつかったりするのも別に平気で、誰かが転んでも振り返りもせず、なんて冷たい街なんだと思ったんですけど、やっぱり住んで、もちろん向こうの職場で仲良くなったりする人も増えていく中で、住めば都っていうのはよく聞きますけど。私はすごい人に恵まれてたなと思って、一緒に仕事する先輩だったり、同期の子だったりは、本当にいい人ばっかりで、今は、「あ、東京に遊びに帰りたいな」とかはしょっちゅうもう。ここのお店のデザインっていうか、雰囲気も、私が東京行った時に、ずっと働かせてもらってたカフェを模してます。こういうメニューも全部そうです。「こういうメニューだったな」とか、こういうものを使ってたなとかっていうのは、もうほとんどその時代、その働いてたところをイメージしてます。

――約束の時間を超過してしまい申し訳ありません。今日はありがとうございました。

〈引用・参考文献〉

樋田有一郎、二〇二〇、「地域移動が形成する家業継承者の二重の主体性――島根県中山間地域の地域内よそ者のライフストーリー分析を通して」『村落社会研究ジャーナル』日本村落研究学会、（五二）一―一二。

YONEX